


聴覚障害児のエビデンスに基づく支援法とは

横浜国立大学提供
作成日 2016年2月22日
更新日

 <p>研究者 顔写真等</p>	<p>研究者氏名 なかがわ たつお 中川 辰雄</p>	<p>所属機関 横浜国立大学 教育人間科学部</p>	<p>関連キーワード(複数可) 人工内耳、聴覚提示、聴覚障害、補聴器、視覚提示 ・研究分野: 聴覚障害教育、オージオロジー(聴覚障害学)</p>
	<p>主な研究テーマ ・聴覚障害児の補聴に関する研究 ・聴覚障害と聴覚認知の発達 ・高齢者の補聴とQOL ・聴覚過敏</p>	<p>主な採択課題 ・基盤研究(B)平成27~29年度(配分総額:8,190千円) 課題名「聴覚障害児の発達過程を考慮した補聴器・人工内耳の評価法と視聴覚の活用支援」 ・挑戦的萌芽研究 平成25~26年度(配分総額:3,510千円) 課題名「補聴器・人工内耳の装用評価に視覚刺激を付加した効果」</p>	

① 科研費による研究成果

・人は日常生活で様々な刺激にさらされてコミュニケーションしている。特に音声言語によるコミュニケーションを考えた場合、聴覚と視覚による情報が大きな役割を占める。

・補聴器や人工内耳を使用している聴覚障害児は、音声言語によるコミュニケーションに視覚と聴覚をどのように利用して情報を得ているかを、視覚だけ、聴覚だけ、視覚と聴覚が同じ、視覚と聴覚が異なるそれぞれの刺激を提示して、知覚検査を実施した。

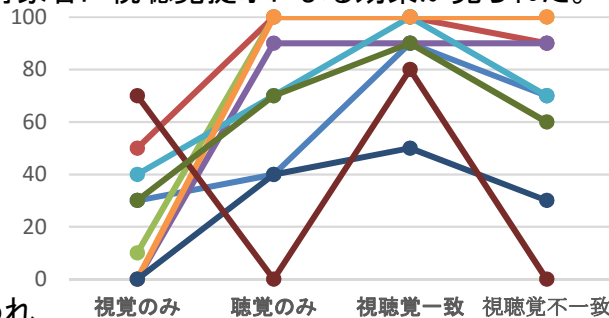
・下図は単語を用いた場合のそれぞれの条件下の正答率を示している。9名中、ほとんどの対象者に視聴覚提示による効果が見られた。

・一名の聴覚障害児は視覚提示の方が単語の知覚成績が良かった。

・単語だけでなく、単音や文についても同様の結果が得られた。

・これまで一律に行なわれてきた補聴器や人工内耳

の装用指導は、個々人の知覚特性を考慮して行うことが望ましい。



聴覚障害児の単語を用いた知覚検査

② 研究成果のその後の展開など

・外界からの情報を理解したり、記憶したり、表現したりする活動を広く、「認知」という。認知特性には生得的な側面と学習によって作られた側面がある。

・右図は小児発達医の本田(2012)が考案した認知特性検査を用いて検査した聴覚障害児の認知特性を示している。

・知覚特性と認知特性の関連性を発達的に検討して、より効果的な支援法とは何かを明らかにする必要がある。



③ 今後期待される波及効果、社会への還元など

・視聴覚の融合を司る部位は上側頭回にあると言われている(Campbell & NacSweeney, 2012)。脳科学からのアプローチが進むことによって、本研究で得られた知見を、生理指標からも裏付けることができればエビデンスに基づく支援法の研究が促進される。

